
私の6ヶ月

水上の魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の6ヶ月

【著者名】

N-マーク

N-1-2-3-3-6-D

【作者名】 水上の魚

【あらすじ】

恋の終わりは突然やってきた。彼女はこれをきっかけにある決意をする。果たして彼女は報われるのだろうか。

プロローグ

桜が散る4月の頃、私の恋も散った。

それは何でもない、彼からの電話。

何でもない、いつもの会話。

何でもない、いつもの休日。

何でもなく終わって欲しかった彼からの電話だった。

「お前には悪い思いばかりさせて、何も良いことなんかしてやれなっかった。

だから、もう、別れよう。」

桜の花びらがまだ少し寒い春風に乗って、舞っている。

「なんで……。」

良い事なんかしてもらえないのも、一緒にいるだけで、いいの。何で自分で決めちゃうのよ……。」

上ずった声が部屋に響く。あの時、私の気持ちが少しでも彼には伝わったのだろうか……。

「ごめん。もう決めたことだから……。」

彼と過ごした今までは一体何だったんだろう。泣くことしかできず、私はただ、ただ次の言葉を待つことしか出来なかつた。

「ごめん……。

……もう、切るから。それじゃ……、ばいばい……。」

聞き慣れた声の、聞き慣れたバイバイが、私の胸の深くに突き刺さつた。

もう永遠に会えなくなるといつ気持ちが、涙に変わつてとめどなく溢れて来る。

何も答えられない訳ではないし、むしろ言いたいことは山ほどあるのに、感情が邪魔しているせいで嗚咽が止まらない。

私が泣いている間、彼はずっと電話を切らずにいてくれた。私の為にしてくれた彼からの最後の優しさだった。

電話の後で…

電話を切つてから、しばらく、私の思考は停止したままだった。実際には数分つだたのかもしれないが、私には時間が止まつていてるよに感じた。

確かに時を刻んでいる時計の音も、花の香りを運ぶ春風さえも今の私には鬱陶しく感じた。私の頭には一つの考え、ただそれだけが、ぐるぐると行き来しては蝕んでいった。

人にとつてはくだらない事実でも、それがどんなに小さなきつかけであつても、ある人を苦しめ続けることがある。幸せだった時は一日でも、一分でも長く生きたいと思つたもんだったが、今は違つた。この先ずっと胸の痛みを抱いて生きていくことは、私にはできない。

「もう何もかも、嫌だ…。」

これから先、彼のことを忘れる日が訪れるのだろうか。何も手につかず、何も喉が通らず、呼吸は浅い今まで、私はこの先何日生きていくのだろうか。

「…死にたい。」

とうとう感情が爆発した私の手には一本のカッターナイフが握られている。ゆっくりと腕を捲り上げる。部屋には、カチカチ、という刃を出す音が静寂を切り裂く。右手に握られたそれを徐に左腕へと近づけていく。一センチ、一センチと近づくにつれ、私の呼吸はどんどんと速くなり、枯れきったはずの涙が頬をつたう。刃は冷たかつた。力を込めて押し付けると鮮血がボタボタと床やカッターを汚した。

「…痛い。」

痛みが増すにつれて、私の意識も遠くなつていった。目には白い世界に赤色が映つていて。まるで独り雪の中にいるような気分だった。

「もう、だめ…。」

赤く染まつたカッターナイフを握り締めたまま、私はその場に倒れ

た。徐々に消えていく意識の中で思い出せるもの、彼の笑顔だけ
だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1236d/>

私の6ヶ月

2011年1月23日03時09分発行